OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈として〉の痛み : 痛みの感覚・機能的側面の復権を目指して
Author(s)	堀, 寛史
Citation	メタフュシカ. 2007, 38, p. 151-163
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10370
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈として〉の痛み
── 痛みの感覚・機能的側面の復権を目指して ──

堀寛史

1．痛みとそうでないもの

痛みとして感じるもの、それは果たして痛みなのだろうか。例えば、長い時間正座をして、立ち上がったときに起こる脚の痺れ、この痺れている脚に少しでも手を触れようものなら脚全体に異様な感覚が走る。異様というのは不快な感覚のことである。触って欲しくない、刺激を入れて欲しくないといった思い、そもそも起きている痺れがより強くなることを知っていると、それはより不快なものに感じる。そして、この異様な感覚は痺れだけではなく、時として痛みとして感じられることもある。それが果たして本当に痛みなのか、あるいは表現としての痛みなのかはその瞬間にしかわからないものの、「痛い」と叫んでしまう。同様に、麻痺を呈し、感覚器ではなく感覚中枢が障害され、四肢が痺れている人に刺激を加えると、人によっては痛いと感じることがある。これらのことを医学の視点からみると、「痛みの受容器の感受性が低下（あるいは感覚神経の閾値低下）して、痛みを感じやすくなった」という説明が可能であろう。しかし、明確にこの状態――感受性の低下――を本人が捉えることは難しい。ただし、本論考ではわかりえないということよりも、痺れを痛み〈として〉捉え直しているという解釈に着目したい。

また、その他の〈として〉の例として頭重感も不思議な感覚であるといえる。頭重とは頭痛とは微妙に言い回しが違う。頭痛とは書いて字のごとく、頭が痛いのである。しかし、頭重感とは頭が重い感じであり、かといってまったく頭痛と判別できるような症状でもない。おそらくは人によっては頭重を頭痛というだろう。そもそも頭重感と頭痛を完全に判別する必要はない。頭重の延長に頭痛が現れることが多々あるので、頭重を頭痛の初期症状、あるいは、下位分類においても問題はない。ただ、ここではっきりしておきたいことは頭痛〈として〉頭重を感じている――解釈している――ということがありえるということである。

人は痛みかどうか判別ができない場合、個人の解釈でそのまさに起きている感覚を痛みか、そうでないかに振り分ける。この振り分けの間にある境界線は何を意味しているのだろうか。本論考は、この痛み〈として〉を見いだすことで、痛みとそうではないものの差異が何であるのかと

いうことをあらわにするための試みである。そのために、最初に痛みとはどのようなものであるかを検討する。それを受け、〈として〉という解釈がどのような意味を持つのかを、マルティン・ハイデガー（Martin Heidegger）の『存在と時間』（1927）に依拠して考察する。そして、最終節では、痛みとそうでないものの境界線上にある何かを探ることに挑戦する。

２. 痛みとは何か

痛みとは何か、という問いに対して明確に回答することは困難である。痛みは他の感覚と違い、1 節で述べたように不明瞭な側面を持つからである。しかし、概念の歴史的変遷、さらに、言語の成り立ちから考えられる痛みの意味を見直すことで痛みの概要がわかってくる。また、国際疼痛学会が示す痛みの定義を（批判的に）みること、この作業も痛みの概要を見るのに役立つ。

パトリック・ウォール（Patrik Wall）の述べるところによると、痛みの概念はルネ・デカルト（Réne Descartes）が「感覚は、刺激の精神的再現以外のなにものでもない」と主張して以来、「古典的な見解では、刺激が純粋な感覚をもたらし、感覚が知覚をもたらす」（ウォール ,2001,p.31）と考えられていた。1600 年代には、感覚について現在のようなニューロンの興奮や電気的伝達という考え方はなかった。デカルトは現在で言う神経の伝達について『省察』の第 6 省察（第一版 1641 年）の中で「運動」という言葉を使用し説明している。この運動とは刺激が「細い糸」を「引っ張り」、脳に指令を与えるという（第 6 省察）考え方である（デカルト ,2006,p.129）。これは「刺激が感覚をもたらす」ということの基本概念になっている。そして、この基本概念は 1960 年代以降に、それまでは不明確であった痛みの発生メカニズムを図式化[1]することに成功した後にも通用していた。

明快な図式で説明された痛み発生メカニズムを使用することで、医学における治療も格段に進歩したといえる。それにより、痛みを有する人に対する治療アプローチが可能になったといえる。ただ、解明されたのは痛み発生メカニズムについて[2]であり、痛みとは何かが明確になったわけではない。

痛み発生メカニズムが提唱される以前（あるいはデカルト以前）の痛み概念は、医学的ではなく宗教的な色合いが強かったといえる。特に印欧語圏では言語の成り立ちからそれが見て取れる。pain という英語の言葉の成り立ちは、もともとラテン語の poene（英語の punishment に関係する）から派生している（Loeser,2005,p.22）。この poene は現代における意味での知覚を指しているのではなく、他から与えられる罰を指している。この他から与えられる罰は自らが犯した罪に対して与えられるもの、罪を犯した結果受けるものである。このように pain はそもそも罪と罰の関係性の中から言語的に発生した。言語以前に生物的に感覚としてあったはずの pain はいつの頃

---

1 痛みを発生させる原因とその受容器、神経経路がわかるようになり、図式化が可能になった。

2 「痛み以外の感覚系と同様に独立した痛覚系が存在するか否かを決定づける第一歩は、神経生理学的に痛覚受容器の独立性を確かにすることであり、この面の研究は Zotterman、Iggo らにより求心神経インパルスの単一線維記録法を用いてなされたが、生理的な痛覚系としての存在が確立されたのは 1960 年代後半からの、Perl らの痛覚受容器、およびその情報を伝える中枢経路に関する研究によるところが大である」（熊澤 ,2006,p.8）と痛み発生メカニズムの歴史的経緯を熊澤は説明している。

からか社会性をおび、宗教性をおび、感覚と認識が混ざりあった、他の感覚に見ることができない意味を与えられた。そして、特にキリスト教圏の痛みは宗教的な意味を強くおびている。

キリスト教の救世主であるイエスは人間に代わって罰を受けるという形で受苦した（the passion）。痛みはキリスト教における一つのシンボルである。このシンボリックな痛みについて英語では特有な表現がある。それを「日本語にない英語特有の表現のひとつに excruciating という言葉があり、十字架のごとき痛み、すなわち、キリスト磔刑の大きな苦難にも匹敵する痛みという意味である」（外 ,2005,p.17）と外は説明する。そして、遠藤周作はその excruciating を『沈黙』の中でイエスが受けた痛みと司祭が受ける痛みの関係から読み手に、まさにその痛みが伝わるように表現している。

> 「ああ」と司祭は震えた。「痛い」
> 「ほんの形でだけのことだ。形などどうでもいいことではないか」通辞は興奮し、せいていた。
> 「形だけ踏めばよいことだ」
> 司祭は足を上げた。足に鈍い重い痛みを感じた。それは形だけのことではなかった。自分は今、自分の生涯の中で最も美しいと思ってきたのも、最も清らかと信じたもの、最も人間の理想と夢にみたされたものを踏む。この足の痛み。その時、踏むがいいと、銅版のあの人は司祭にむかって言った。踏むがいい。おまえの足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はおまえ達に踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かつため十字架を背負ったのだ。（遠藤 ,1981,p.266）

この場面で表現されている痛みは、印欧語である pain の根源的意味[3]を持ち、精神的な苦痛を指していると考えられる。この痛みは、人が背負っている大いなる罪であり、与えられた原罪に対する罰を表している。このように表現される痛みはキリスト教徒でなくてもイメージできるものである。たとえば、私たちが抱いている信念や精神的に重要と考えていることの崩壊に際して、同様に痛みという表現を使用することがある。根源的に私が変化するような出来事、特に、他からの刺激に対しての反応という形、何者かによって与えられる変化は自らの選択如何ではなく、時には受動的に変化させられることがある。それは宗教的信念をとくにもたなくとも、私たちに起こりうることである。そして、日本語においてもこのようなことを痛みと表現する。

上記のような私たちが持ちうる根源的であり精神的な痛みの表現を、単純に痛み発生メカニズムに説明することは出来ない。医学の切り口（「それは痛みではなく、単なる罪責感です」といった切り口）で全面的にその表現を否定しても、十分な説明であるといえないし、さらには古来より使用されてきた言語表現が急に使われなくなるわけではない。このことから、使い古されてきた表現であるとしても、コミュニケーションの道具として使用され続けているところに痛みという表現の有用性があるのだと考えられる。それは単に比喩として使用され続けたというだけで

[3] 世界保健機構が提唱するスピリチュアルペインに分類される痛みであると筆者は考えている。

はないだろう。痛みという言葉に潜む特別な意味を探ろうとし続けている私自身が持つ解釈の意図に導かれているのではない――そう私は確信している。その結果、私は比喩としてのみの痛みを捉えること（痛みの機能を逸脱したもの：後述）を全面的に受け入れることが出来ないでいる。

これは、慢性疼痛に苦しむ人々が現代医学によって救われていないという現実を目の当たりにして、私自身が認識したことである。慢性疼痛に苦しむ人々は場合によっては自分の感じている症状としての痛みを全面的に否定されることもある。また、痛みが引かないことを責められる事もある。慢性疼痛に苦しむ人すべてがただ比喩のみの痛みを表現として使用しているのだろうか。極論すれば慢性疼痛は痛みではないのだろうか。この問いに答えるためには、痛みとは何か、という問いへの答えを明確にする必要があると考えている。

痛みとは何か、という問いに答えるために、現在、国際疼痛学会が示している定義（以下、「定義」）を確認してみることにする。この「定義」は 1979 年に精神科医ハロルド・メルスキー（Harold Merskey）を座長とするグループが国際疼痛学会の現代的定義を出すようにと要請され示したものである。

> （痛みとは）現にある、あるいは潜在的な組織損傷と関係づけられた、もしくはそのような損傷の観点から記述された、不快な感覚的、情動的経験である
>
> An unpleasant sensory and emotional experience associated with actual or potential tissue damage, or described in terms of such damage.

この定義で述べられている痛みとはどのようなものであろうか。その特徴として第 1 に刺激と反応という形での痛みを表現しているわけではない。つまり、組織損傷がない情動経験に関することも痛みであると理解できる。第 2 に現在、その瞬間にない組織損傷（potential tissue damage）によって引き起こされるであろう痛みも、「定義」上では痛みである。それは、将来に予測されうるダメージとしての痛みであり、例えば、今日の午後歯医者に行って歯を抜くというときに、どのくらい痛いのかということを予測する痛み（潜在的痛み）もすでに痛みであるということになる。

では、結局のところ痛みとは何であろうか。確かにこの「定義」を持ってすれば広範囲な痛みの解釈が可能である。前述の pain の成り立ちから考えられる痛みも、この「定義」の範疇におさまる。さらに、慢性疼痛を有する人が組織損傷なしに、症状としての痛みを訴えたとしてもこの「定義」の範疇におさまる。この「定義」は受け皿として広く、私たちの痛みという感覚はなんと奥深いものであろうかと妙に納得させられる気さえする。しかし、痛みとは何かという問いに完全に答えているのだろうか。この「定義」を全面的に受け入れた場合、私たちは何を痛みと表現してよく、何を痛みと表現してはならないのだろうか。この疑問は痛みの核心となるものがどのようなものであるかを再度見直すことにつながる。

痛みの核心は上述した pain の成り立ち以前の痛みの存在から導き出される。私たちがコミュニケーションの中で使用している日本語の言葉としての痛み、また、英語圏で pain という単語

を発する以前に、感覚としての痛みが必ず存在していた。これは痛み発生メカニズムで語られる侵害刺激を身体が受けたということを知らせるサインのことである。自らの組織が損傷しているということを知らせるための機能としての痛みであり、危険に対する逃避反応としての痛みである。脊椎動物の進化の中で発達した、機能としての痛みは現在の私たちの中にも機能として存在している。このことは痛みを語る上で絶対的な基準となることを強調したい。痛みは私たちが事物に意味や言葉を与える以前からある感覚である。つまり、本論考では痛みの核心となるのは刺激に対する反応を伝える機能であると主張する。

このことを踏まえて「定義」を見てみると、その瞬間にない刺激――潜在的な組織損傷（potential tissue damage）――によって痛みが引き起こされうるということになっている。今はなくとも、いずれ起こりうるだろう不快な組織損傷と情動経験が痛みに分類されると理解できる。このことは先ほど主張した痛みの核心部分の機能から逸脱していることになる。

では、逆に「定義」の核心部分はどのような主張であろうか。それを「定義」の注釈から考えてみる。第 1 に痛みは主観的であるということ、それに付随して、第 2 に痛みを個人の経験とした[4]ということである。第 3 に痛みは不快であると明言したことである[5]。このことに、ウォールが「定義」の新たなる特徴として「普通の人は不快感を伴わない純粋な痛みを経験しない」（ウォール , 前掲書 ,2001,p.34）と述べていることが関連している。

これらの説明は、主観的で経験の外にでない痛みは、個人にとって不快であるという情動的側面を強く押し出しており、この側面を強調するがゆえに感覚・機能的側面についてほとんど語られていないことに気付く。むしろ、感覚・機能的側面に関しては否定的である。そのことを最も端的に示しているのは「この定義は痛みと刺激の結びつきを避ける」という注釈である。さらに「侵害刺激によって侵害受容器と侵害受容路の活動が引き起こってもそれは痛みではない」と述べていることも関係する。この注釈からすると、結局痛みとは不快感を覚える感覚を主観的に痛みであると判断し、それらすべてが痛みの「定義」に当てはまるという解釈が許されることになる。そのように解釈すると、この「定義」は不明確で漠然としたものであると読み取られても仕方がない。

確かに、注釈で述べている「もし私たちが主観的な報告を採用するなら、その経験を、組織損傷に由来する経験から識別する方法は、通常はない」という説明は正しい。しかし、それを理由に「もし、痛みとして経験を考え、そしてもし、組織損傷が原因の痛みを同じ方法で報告されても、痛みとして受け入れるべきである」と断定するのは説明が不十分である。この不十分さは、痛みとそうでないものの区別がなされていない点にある。この区別が明確になるにつれて、注釈の内容がより正確に解釈できるようになるだろう。あるいは、批判的に論究することも可能だろ

---

[4] 注釈では「痛みはいつも主観的である。経験を通した言葉をそれぞれ個人で学び適応し、人生の早い時期の受傷と関係付ける。生物学者は苦痛を引き起こすそれらの刺激が組織損傷であることを認める。したがって、痛みを私たちは実際にあるいは潜在的な組織損傷を結びつけた経験であるとした。それは疑いなく身体の全体、あるいは一部の感覚であり、しかし、それはまたいつも不快でそれゆえ情動的な経験である」と述べられている。

[5] 注釈では「痛みに似た、しかし不快ではない感覚、例えば、針でチクっと刺す、これを痛みと呼ぶべきではない」と述べられている。

う。そして、それを受けて痛みとは何かという問いを見直していく必要がある。

では､痛みとそうでないものをどのように区別すべきであろうか。1 節で述べた痛みと痛み〈として〉の判断を次節から見ていくことで区別することに挑戦する。その区別を明確にし、感覚・機能的側面の痛みを復権することで、より明確な痛みの概念を構築を目指す。

３．２つの〈として〉

痛み〈として〉の判断は、端的にそれが痛みであると了解することである。そして、私にとってそれが痛みであると解釈するということである。ハイデガーにおいて「解釈」とは「了解の完了」である。それを踏まえて考えると、たとえ痛み〈として〉感じていても、それを疑わずに痛みと了解すればそれは痛みとなるのか。ひいては、痛みと「解釈」されるのであろうか。「解釈」されてしまうということは「痛みとしての痛み」が完了することになる。しかし、この「解釈」の構造が、必ずしも成り立つとは限らないということを本論考は主張したい。必ずしも成り立たないという事実は、前節で述べた国際疼痛学会の痛みの定義と私が主張する感覚・機能的痛みとの差異を際立たせることにつながる。つまり、痛みとそうでないものが解釈学の視点から、明確になると考えられる。

では､なぜ「痛みとしての痛み」が常に成り立たないのであろうか。それを確認するためには、〈として〉の種類を区別してみることが必要になる。その区別のために、ハイデガーの『存在と時間』（1927）第 32 節「了解と解釈」、第 33 節「解釈の派生的様態としての陳述」（ハイデガー,2003,pp.47-76）の中で述べられる､「実存論的・解釈学的な「として」」と「陳述の命題的な「として」」[6] との比較を参照する。これら 2 つの〈として〉の哲学的意味を確認した後に、痛み〈として〉ということを論究することになる。

ハイデガーは『存在と時間』第 32 節において、まず「解釈」とはどのようなものであるかを定義づける。そのことは少し前に触れたが、再度詳しく述べると､「解釈」とは「了解の完了」であり、さらに「解釈は、了解されたものを承知することではなく、むしろ、了解において企投された諸可能性をしあげること」（同上 ,p.48）である。この節でハイデガーは「解釈」の概念を分析し、〈として〉について解釈学的な検討を行っている。それらのことを踏まえたうえで、〈として〉の区別についてハイデガーは以下のように述べている。

> 配視的に了解しつつある解釈（ヘルメーネイア）の根源的な「として」をわれわれは実存論的・解釈学的な「として」と名づけて、陳述の命題的な「として」から区別する（傍点原著者）（同上 ,p.70）

このように区別された「実存論的・解釈学的な「として」」と「陳述の命題的な「として」」とはいかなるものであろうか。このことが述べられている第 33 節は陳述（あるいは言明）の分析のために設けられたものである。第 33 節は以下のような書き出しで始まる。

すべての解釈の根拠は了解のうちにある。解釈のうちで分節されているものそのものと、了解のうちで総じて分節されうるものとして下図をえがかれているものとが、意味なのである。陳述（「判断」）が了解のうちにその根拠をもっており、解釈の一つの派生的な遂行形式を示しているかぎり、陳述もまた意味というものを「もっている」（傍点原著者）（同上,pp.60-61）

ハイデガーは了解、解釈、陳述の関係を意味によって解明しようと試みている。陳述を「伝達しつつ規定する提示」と定義づけ、「陳述は、解釈一般と同じく、実存論的基礎を、予持、予視、および予握のうちに必然的に持っている」（同上,pp.67-68）とし、陳述と解釈の構造上の類似性を述べている。このように陳述と解釈の関係性を述べながら、論は〈として〉に近づいていく。

ハイデガーは「陳述の命題的な「として」」の「命題的」ということをアリストテレスの命題論（Hermeneutik）から紐解いていく。そこで扱われている命題とはどのようなものなのか、オットー・ペゲラー（Otto Pöggeler）は「アリストテレスによれば、文とは名詞と動詞を結びつけ、あるものをあるものとしてみなすことであるが、このような文は解釈であり、「命題」である」（ペゲラー,2003,p.241）と解説する。さらに「命題（アポパンシス）が、すなわち、或るものを或るものとして指示しつつ、見させることが、求められた特別な命題であり、解釈となる」（同上,p.241.）と述べている。つまり、「或るものを見させつつ理論的な仕方で裸の眼前性へと方向づけることは或るものを或るものとしてみなすこと」である。これがペゲラーによる「命題」である。そして、この「或るものを或るものとみなす」ということは或るものをそのまま受け取ることであり、或るものは或るものになる。つまり、その中にある〈として〉が失われようとも文字通りあるものが命題的に受け入れられるのである。「重いハンマー」では重いということが提示されていて、かつてそのものを持ち上げ重いと思ったことがあり、今持ち上げてもそれは重いであろうということが、そのハンマーの中に内在しているのである。それは「存在者をその存在者のほうから見えるようにさせる」ということであり、ハンマーそのものが「重い」とあらかじめ提示しているのである。

「陳述の命題的な「として」」は或るものを素直に或るものとして受け入れる。一旦、痛みの話に戻せば、私の痛みは私にとって間違いなく痛みとして解釈されうるということである。「命題的な「として」」の痛みは、その存在が疑いの余地のない痛みであり、常に痛みのかたちをとっている。それは、スタート時点からが痛みであり、痛みではないという否定要素を内包していないのである。この条件であれば、私が痛みと思えば、痛みとして受け取ってよいことになり、国際疼痛学会の痛みの定義にきれいに合致する。そこには「これは本当に痛みなのであろうか」という疑問を持ち了解できないという状況が入り込めない。そして、痛みとして痛みを感じている場合には「これは痛みです」という陳述が常に成り立つということになる。

このように、命題的に痛み〈として〉痛みを感じることこそ、痛みであるという理解が成り立つ。しかし、このことは常に痛みという構造を前提にしており、実のところ、痛みについての論理的な了解がされているにすぎない。このように痛みの固有性を常に受け入れているということ

において、解釈は痛みの存在そのものに到達できているといえるであろうか。痛みの存在を抜きにして、定義上の不快という固有性においてのみ、それを痛みと見なしてしまっているのではないだろうか。ガダマーの解釈学に従って述べれば、それは「先入見の暴力」に打ち負かされた状態であるのではないだろうか。

ハイデガーにおける〈として〉の分析に関してはまだ、「実存論的・解釈学的な「として」」が考察し残されている。まず、ペゲラーによる「陳述の命題的な「として」」の批判的検討を見てみよう。

> 命題的な仕方で或るものを或るものとして見させる言明[6]は状況のダイナミズムを無視している。それゆえ、命題論的「として」は、ある状況の完全な有意味性の連関から或るものを或るものとして把握する際に基準となる「として」を「平準化」[7]してしまっている。それゆえ、命題（アポパンシス）は状況の解釈学的開示からは区別され、まさしくこのような開示の特殊な場合として（すなわち「脱世界化」として）規定されるのである（同上 ,p.242）

この批判の中にある「状況のダイナミズム」というものが、「実存論的・解釈学的な「として」」の主題的なキーワードとなる。解釈は、解釈学的には「現在の状況」を基盤に出発する。解釈とはあらかじめ了解していることをさらに展開し分節化することである。解釈は現在の状況の中に投げ出されており、そのつど、その中でしか理解されないというのが「解釈学的状況」である。つまり、ペゲラーの言わんとすることをより解釈学的に読み取ろうとすれば、「解釈学的状況」の中に投げ出されているということが「陳述の命題的な「として」」の中には踏まえられていないということになる。そのことによって〈として〉は「事物的にしか存在していないものの一様の平面のなかへと押しもどされる」（ハイデガー , 前掲書 ,2003,p.70）ことになる。それが〈として〉の平準化である。

ペゲラーはハイデガーの哲学の方向について、「哲学は「解釈学的」哲学として、ある状況を開示しその広義の開示において「真理」を伝えるような言説（レーデ）のあり方へ向かう」（ペゲラー , 前掲書 ,2003,p.242）と指摘する。そして、解釈学的な理解が要求されていると指摘した上で、「それゆえ、哲学的な言説（レーデ）を命題（アポパンシス）へと方向付ける立場は破綻せざるをえないのでないか」（同上 ,p.243）とハイデガーが問うていると述べている。ここからいえるのは、〈として〉を考えるにあたって必要なことは「状況を開示する」ことの認識であり、命題的に或ものの一切、受け入れることからの方向転換が示唆されているということであると考える。

では、「状況を開示する」というのはどのようなことであろうか。「状況」とはガダマーによれば「地平」である。この「地平」は過去から未来に向けた時間のベクトルを含んでおり、「今」

6　本論考で参照した『存在と時間』邦訳中では「陳述」と訳されている。
7　本論考で参照した『存在と時間』邦訳中では「水平化」と訳されている。

だけの場ではない。ハイデガーによれば「地平」とは現在において過去を担い未来を孕むような、そうした動的な「伸び広がり」（丸山 ,1997,p.132）である。そのような「地平」は「今」という瞬間によって作り出されているのではなく、過去を踏まえ、さらには未来に向けた可能性を含めている連関のことである。「状況を開示する」ということはまさにこの地平に立っているということを認識することである。そして、解釈において意味は連続性を有しており、単に「命題的」に意味があるわけではない。つまり、動的な「のび広がり」をもった意味は「平準化」することができずに、常に、状況の影響を受けるのである。

以上を踏まえて「実存論的･解釈学的な「として」」とはどのようなものであるかを考える。「或ものとしての或るもの」は解釈学的状況の中では、一定ではない。そして、命題的な基盤を持ったあるものの解釈は作用史的変化の中で循環していく。さらには、命題的なあるものに対する意図によっても、解釈は変化の可能性を持っている。ただし、この意図は理解と誤解の関係性の中に落とし込まれているために、「真理」の足もとにあるときこそ、それがあからさまに誤解である可能性も十分にありえることを考慮しておく必要がある。解釈そのものについて意図の与える影響は、それを意識するにせよ、しないにせよ、まさしく状況の中で別の方向からの影響と響き合う。ゆえに「実存論的・解釈学的な「として」」は常に循環の中にあることがわかる。その循環の中で或るものは固有性を獲得することになる。その固有性は特定のところから汲み取られるのではなく、或るものそのものの状況からそのつど汲み取られるのである。新田が述べる「知が知であるための根源的性格を表す「として」の機能は、客観化的対象規定に先立っていつもすでに地平として機能している」（傍点原著者）（新田 ,2006,p.93）[8]これはまさに「実存論的・解釈学的な「として」」の機能を適切に説明している。

「陳述の命題的な「として」」と「実存論的・解釈学的な「として」」との区別を明確にしたところで痛みの論究に戻る。先に命題的な痛みとしての痛みを述べた。ここでは解釈学的な痛みとしての痛みをみて比較する。

解釈学的な痛みとしての痛みとはどのようなものであるのか。その特徴として考えられるのは、第 1 に痛みそのものが固有性を命題的には有しないということである。それは、私が痛みと思えば常に痛みであるという事態が成り立たないということを意味する。ある状況においてそのように解釈されているに過ぎないのである。第 2 に過去に受けた痛みについての経験が先入見としてあり、痛みの解釈において、その影響が色濃くでるのである。つまり、痛みを受ける際に過去の記憶が甦り、初めて受ける同様の刺激とは違った解釈がされる。時には不快だと思い、特殊な場合には快楽にもなりうるということである。

今回挙げた特徴に共通していえることは、〈として〉の「客観化的対象規定に先立っていつもすでに地平として機能」である。そして、生理・病理学からの解釈においての痛みの規定、つまり、客観化的対象規定に対して、先立った地平で解釈するという解釈学的な痛みとしての痛みは、

[8] 論集としての発行は 2006 年であるが論文の発表は 1980 年である。

より正確な意味での痛み[9]を認識することが困難であるという特徴を持つ。ただ、解釈学的な痛みとしての痛みは、私たちにとって、かつてどこかで受けた痛みによって規定されている。このことは「定義」の注釈にある「経験を通した言葉をそれぞれ個人で学び適応し、人生の早い時期の受傷と関係付ける」に対応する。そして、それは生理・病理学からの解釈における痛みの規定と同じ地平に立つことはできない。解釈学的な痛みとしての痛みは解釈学的循環の中に投げ出されており、生理・病理学からの解釈における痛みの規定という感覚のスタート地点にまでさかのぼれないのである。

以上のように本節では〈として〉について解釈学の視点から考察した。そのことを踏まえて、次節では、痛みとそうでないものの区別を行い、痛みとは何か、という問いに挑戦する。

４. 痛みの感覚・機能的側面の復権

解釈学的な痛み〈として〉の痛みは、人が生を受けてから個人（人格）が形成されると同じプロセスで成長し変化する。その成長と変化は、痛みという感覚の解釈的状況を担う。その意味では、解釈学的な痛み〈として〉の痛みは、常に新しく、個人にとって同じ痛みは存在しえないといえる。そのつど、「これは痛みである」あるいは「これは痛みではない」という判定を試みてみても、命題的に痛みを規定しない限り比較による判断は成り立たない。以前あった痛みはそのときの痛みであり、今ある痛みは今ある痛みである。これらは同質であったとしても、解釈学的には決して同じものではない。

では、何をもって痛みを判断し、「これは痛みだ」ということが出来るのだろうか。例えば、組織損傷が痛みを司ることができるだろうか。組織損傷によっておこる炎症反応、つまり、発痛物質が血中に存在することが痛みであろうか。生理・病理学的にそれは痛みだと判定されたとしても個人においてそれはまったく見えない世界であり、例えば、麻酔下では痛みとして痛むことが出来ないので、痛みは否定される。その意味で組織損傷の有無を痛みの規定に使用することはできず、「これは痛みだ」といいきることも出来ない。また、組織損傷が明確ではない痛み（例えば１節で述べたような頭重感）についてはうやむやな回答しか出せないであろう。どちらにせよ、組織損傷を痛みの規定の中心におくことは出来ない。このことについては、私は「定義」と同意見である。

次に、不快感（unpleasant：不愉快であること）を中心におくことは可能であるのかということを考える。「定義」の注釈では「痛みに似た、しかし不愉快ではない感覚、例えば、針でチクっと刺す、これを痛みと呼ぶべきではない」とされている。つまり痛みには必ず不快感が伴うとしている。では、逆に不快感だけで痛みは成立するのであろうか。そもそも不快感とは何であるのかを論じる必要もあるだろう。「定義」の上では unpleasant sensory experience とされているが、疼痛学の世界ではこのことを suffering（苦痛･苦悩）として表現する。ほぼ同義語であるのだが、suffering には情動的な嫌な感じという意味も内包されている。ここでは、基本的に同義として考

[9] 国際疼痛学会の痛みの定義の注釈にある「普通の人は不快感を伴わない純粋な痛みを経験しない」に対応する。

えた上で話を進める。

不快感とは痛みに付随してのみ起こるものではない。例えば、誰かに怒られるといったようなことは、痛みがなく不快感を覚える。先天性無痛･無汗症の人は痛みの持つ防御反応（後述する）を行使することが出来ない。そのため､幼少期に強く頭を打っても痛みによって泣くことはなく、さらには骨折をしても本人は見た目が変化しない限り気付かない。しかし、言語理解が可能になるにつれて、教育としてきびしく行動を規制すると危険な行動をとることに対して不快感を覚えるようになるという。痛みの持つ防御反応を怒られることに対する恐怖感や不安感で代替しているのである｡万能な代替機能であるとは言いがたいが日常生活をおくるのに支障が無い程度に｢気をつける」ようになるという。

先天性無痛・無汗症の人は痛みを感じる事は出来ない。しかし、不快感を覚える。正確には主観的にしかわからないもので、場合によっては本人が不快な状態を「痛い」と表現することがあるかもしれないが、それを痛み〈として〉、つまり、痛みを感じえない人の不快感を痛みと断定することが出来るだろうか。本論考ではそれを痛みとして認めることが出来ない。それは、本論考が感覚・機能的側面を重視する主張を掲げているからである。

不快感について確認した上で、2節で述べた痛みの感覚・機能的側面を説明し、それが痛みに必要であるかということに論を進める。再度述べるが、「定義」において痛みの感覚・機能的側面は重要視されていない。特に機能面に触れる言及は一切無い。なぜ「定義」には痛みの機能に対する言及が無いのか。痛みはそもそも生き物に与えられた身体を防御するための機能であるということには疑いの余地が無い。例えば、脊髄損傷の人は痛みが無いゆえに褥創（床擦れ）を作りやすい。先天性無痛・無汗症の人は痛みが無いゆえに（注意するようになるとはいえ）組織損傷を起こしやすく、また、その組織損傷由来の感染症に罹患しやすい。さらに、麻酔によって痛みを麻痺させることで体を切開し、臓器を取り出すことができる。つまり、これらのことは痛みの機能の必要性を十分に示している。感覚があるからこそ機能が発揮でき、機能があるからこそ感覚が生きるといえる。感覚を広く理解すれば、機能は感覚に内包されているといえるだろう。痛みという感覚には防御反応という機能がもとから潜んでいる、と断定できると考える。

そのことを踏まえ、感覚･機能的側面を解釈学的な痛み〈として〉の痛みの視点から見てみる。機能を私たちは感じることが出来ない。防御反応として確認できても、それが機能であると感じる事は出来ない。感じるのは痛みである。痛みを痛み〈として〉感じ、機能を痛み〈として〉感じるのである。前述したように解釈学的痛み〈として〉の痛みにおいては痛みの解釈がそのつど違う。純粋な比較は不可能である。しかし、解釈が違っていても根源的にある痛みの機能は変わりようが無い。そのつど、機能に変化が起きるわけではない。その機能は、身体を防御することに徹している。意識レベルがもっとも低いとされる昏睡（deep coma）の状態とは「皮膚に侵害刺激を加えても全く反応しない」（吉元ら ,1996,p.150）場合であり、つまり、痛みの機能がなくなった人は、意識が無いとされるのである。

以上の考察から、痛みとそうでないものとは、機能によって区別されるものであると考えられる。それは危険を知らせることであり、また、程度を制限する、限界を知らせるといった防御反

応である。慢性疼痛においても同様の機能が内包されていると考えている。このことについては違う機会に論述したいと考えている。

引用文献

パトリック・ウォール . 横田敏勝訳（2001）. 疼痛学序説 痛みの意味を考える , 南江堂 .

ルネ・デカルト . 山田弘明訳（2006）. 省察 , ちくま学芸文庫 .

John D.Loeser;Pain,Suffering,and the Brain:a Narrative of Meanings.Narrative, Daniel B.Carr , John D.Loeser et al.（2005）.Narrative Pain, and Suffering,Progress in Pain Research and Management Volume34.IASP PRESS：17-27.

熊澤孝朗（2006）. 痛みの意味, 理学療法 Vol.23 No.1：7-12.

外須美夫（2005）. 痛みの声を聞け 文化や文学のなかの痛みを通して考える , 克誠堂出版 .

遠藤周作（1981）. 沈黙 , 新潮文庫 .

International Association for the Study of Pain/ IASP Pain Terminology. http://www.iasp-pain.org/terms-p.html#Pain（2007.9.6. 取得）.

ハイデガー . 原佑 . 渡邊二郎訳 .（2003）. 存在と時間Ⅱ , 中公クラシックス W28.

オットー・ペゲラー . 伊藤徹訳（2003）. ハイデガーと解釈学的哲学 叢書・ウニベルシタス 783, 法政大学出版 .

新田義弘（2006）. 現象学と解釈学 , 第一部 現象学と解釈学 . 第二章 現象学の歴史的諸展開――本質現象学から「人間と世界」の現象学へ . ちくま文芸文庫 .

丸山高司（1997）. ガダマー 地平の融合 , 現代思想の冒険者たち 12. 講談社 .

吉元洋一 . 森重康彦 . 千住秀明（1996）. 理学療法評価学―理学療法学テキストⅡ―, 神陵文庫 .

（ほりひろふみ　臨床哲学・博士後期課程）

Pain “As” pain
― Pay attention to sense of pain and its functional aspect ―

Hirofumi HORI

The purpose of this research is pursuing something on the border between pain and what is not pain in order to distinguish them. The author regards what relates to the border as pain “as.” The idea of pain “as” has occurred to the author on the basis of a question if we feel some sense like pain “as” pain. The term “as” used here is led from Heidegger’s “Being and Time.” Heidegger makes a distinction of “as” into “as” of declaration of proposition and “as” of existential and hermeneutic order. In this article the author refers to “pain as pain” and regards Heidegger’s existential and hermeneutic “as” as an important suggestion of essential exegesis of pain. Then the author pays attention to the situation “as” has. This situation refers to hermeneutic one, which means “horizon” in Gadamer’s thesis. In other words, comprehension is affected by each situation and exegesis always changes into new form. Therefore, it can be said that pain as pain must not be propositionally defined. The author insists that exegesis of pain must be open to every situation.

Then, can we see what remains in pain and distinguish pain and what is not pain in the situation where we abandon the concept of propositional pain? On that point the author pays attention to sense of pain and its functional aspect. The fundamental function of pain is protective response, which works regardless of interpretation of each person. The definition of pain made by International Association for the Study of Pain does not refer to this function. But the author insists that the function of pain should lie at the center of the reason of pain in this article. We can distinguish pain and what is not pain only with this function. In other words, pain having the central core of the function of pain is interpreted according to each situation. The author insists in this article that the meaning of interpreted pain should vary in each situation but there should be no difference in functional meanings of pain.

「キーワード」
痛み、〈として〉、国際疼痛学会の痛みの定義、解釈学、機能